

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	河野さんの協同組合論
Author(s)	先崎, 千尋
Citation	茨城大学政経学会雑誌, 82: 15-21
Issue Date	2013-03-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/3468">http://hdl.handle.net/10109/3468</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

# 河野さんの協同組合論

まつ さき ち ひろ  
先 崎 千 尋

## 1. はじめに

河野直践さんが昨年8月に亡くなった。彼は私よりも19歳年下である。わたしたちは協同組合運動というエンドレスのリレーのランナーである、と考えてきた。いつか二人で並走することもあったが、本来なら、そのバトンを私が彼に引き渡すはずだった。わたしは大学を出てからの40年を超える社会生活のなかで、大半の人生を農協の現場で過ごし、農協はかくあるべしと思いつつ行動し、自分で体験したことや農協への思い入れをその都度まとめ、論考を発表してきた。

70歳を目前に控えた3年前に思いも寄らぬ姿、形で農協を離れることになり、「お前の出番は終わった。次の世代にバトンタッチするときだ」と思い知らされた。だから、私の思い入れを河野さんに引き継いで欲しかった。それが逆になってしまったことを残念に思う。

私は、河野さんが大学を出て、全国農協中央会（以下全中）に入ったことを知っていたが、その頃は水戸市農協から瓜連町農協へ移り、現場で悪戦苦闘していたときだったので、直接顔を合わせることはなかった。

1994年8月、河野さんから手紙と『協同組合の時代—近未来の選択』が送られてきた。会ったことがない彼から何故送られてきたのかは同書第一章の中の「農協の『二一世紀戦略』をめぐって」を読んですぐに分かった。1991年10月の第19回全国農協大会で決議した「農協・二一世紀への課題と挑戦」に対して、私は『基本戦略』には、農協の将来像、二一世紀の農協像が出ています。しかし、そのときに組合員の暮らしがどうなっているのか、その地域がどうなっているのかということが、この中では全然浮かび上がってこない。農協があることによって、構成員である組合員の暮

らしがどれだけよくなっているのだろうか、私たちの暮らしが明日はこう変わっていくという夢を見ることができない」と批判していた（拙著『よみがえれ農協』全国協同出版、1992）。

それに続けて私は「農協はその歴史的使命を終えつつあり、今後もなお存続するとすれば、それなりの存在理由が必要であるし、それにふさわしい形の組織に脱皮しなければならない」が、「農協の現実……すべてゼニカネで勘定し、計数化できないものはやらないという傾向が年々強くなって」、[小手先の『改革』、『挑戦』では農協組織そのものが解体、終わりへの道を歩んでいるとしか見られない」と書いた。

河野さんは私のこの文を引いたのちに、「（農協）経営の厳しさが見通され、事業・組織の表面的な改善だけでなく体質そのものの転換が求められてはいるものの、多くの関係者にとって納得のいく具体的展望は、必ずしも描き切れていない」とまとめている。

このことがきっかけで、河野さんとの付き合いが始まった。河野さんはその後茨城大学に転じ、距離的には随分近い関係になった。酒席を共にし、東原の宿舎まで送って行ったこともあったが、つかず離れず、べたべたした関係にはならなかった。研究室は斎藤典生教授の隣だったが、ほとんどそこで彼の姿を見かけたことはなかった。昨年6月の茨城大学の公開講座で会ったのが最後だった。

今回、河野さんの追悼文を書くにあたり、彼の著書をまとめて読むことができた。そして、彼が農協を含む協同組合に何を期待し、今後はどうあればいいのかが分かった。また、これまで気づかず、今回ああ、そうだったのかと思うことがいくつかあった。例えば、私がこれまで高く評価して

きた『生活基本構想』（1970年の第12回全国農協大会で決議）の中に「一般協同組合法制の検討をすすめる」という文言が入っていたことがそれである。これからの協同組合にそのような道があることを意識して読み込まなかったからだと反省している。

河野さんは学生時代に有機農業に興味を感じ、農作業体験や市民運動などに関わり、営利企業とは違った農協や生協という協同組合組織に興味を持ち、金儲け目的の企業で働くよりは協同組合運動の場で働きたい、という理由で全中に就職した。途中で大学教授に転じたが、彼が残した著作をもとに、ほとぼしる彼の情熱を追いかけてみよう。なお、本稿で取り上げた河野さんの協同組合に関する著作（編も含む）は次の通りである。雑誌論文や『食・農・環境の経済学』（七つ森書館）もあるが、今回は協同組合の著作に限定した。

『協同組合の時代－近未来の選択』（日本経済評論社、1994）

『産消混合型協同組合－消費者と農業との新しい関係』（日本経済評論社、1998）

『協同組合入門』（創森社、2006）

『新協同組合とは－そのあゆみとしくみ（改訂版）』（協同組合経営研究所、2007）

『新協同組合の時代』（家の光協会、2007）

『人間復権の食・農・協同』（創森社、2009）

## 2. 『協同組合の時代－近未来の選択』

研究者にとって、処女出版が最も勢いよく、その人のその後の研究生活を位置付ける、と聞いたことがある。本書は河野さんが全中から協同組合経営研究所に出向し、東京大学大学院に通い、修士論文としてまとめたものである。

彼が何故協同組合研究に取り組んだのか。その答が冒頭の「はじめに」にある。

まず、この本が書かれた20世紀末。「経済社会のとめどないグローバル化・ハイテク化・情報化がすすみ、競争原理・会社社会の弊害も蔓延するなかで、現実苦しんでいる人たちがいる。我々自身もまた、どこへ連れて行かれるのかわからな

い不安を感じ、傷つき、疲れはじめています。そして、人類にとってかけがいのないこの地球環境が危機に瀕し、あえぎはじめています。その出口を求めても、一人ひとりのささやかな心構えだけでは片づかぬほど問題はあまりにも大きく、答は容易には見出せない」。

そして河野さんは、協同組合はひとつの有力な答であるが、これまでの協同組合研究のなかにその答は見つからなかった、物足りないとし、「協同組合の本質にかんしてこれまで通説をなしてきた見方を批判的に検討し、それに代わる本質論を積極的に提起することに本書の特徴がある」と研究を始めた動機を述べている。

その上で、協同組合の本質を明らかにするにあたっては、理論研究とあわせて、協同組合だけでなく他の形態の組織を含めた事例研究も必要だ、としている。

本書は、「協同組合の現在－何が問題なのか」、「協同組合研究の再検討－協同組合の機能をめぐって」、「組織形態の比較分析－環境問題対応の事例をめぐって」、「協同組合社会の可能性－協同組合本質論の再考を通して」、の4章から成っている。

第1章は問題提起にあたる。このうちの1節では、世界および日本の協同組合の情勢と、本書執筆の時点で提起されている組織の戦略論を概観している。そこでは協同組合が「危機と可能性の並存」ともいうべき状況にあるなかで、組織戦略が必ずしも明確化されていないことが述べられている。河野さんが、わたしの全国大会決議への不満、不安を述べたことも掬いあげてくれている。

続く2節では、一般の人々の側から協同組合はどのように見られているかが検討されている。3節では、これらをふまえ、情勢を見極め、戦略を確立するには、今日における協同組合の存在意義と果たしうる機能がいかなるものであるかを解明することが、改めて課題になっていることが強調されている。

第2章ではこれを受けて、協同組合の機能についての経済学上のこれまでの議論を振り返り、関

連分野の動向を概観し、これからの協同組合研究の方向を論じている。まず1節では、協同組合の果たしうる機能について、①協同組合が中心となって独自の経済体制をつくる可能性があるという見方と、②協同組合の機能はもっと限定されたものにすぎず、独自の経済体制を創出する機能はないとする消極的な見方があったことが紹介されている。そして、論争をつうじて後者のような消極的な見方が通説的位置を占めてきたとはいえ、実際には今なお相当な理論の幅があること、また通説的な理解の基礎を築いてきた従来の経済学の枠組みは妥当性を欠きつつあり、論争は未だ決着がつけられたとはいえないことが述べられる。

続いて2節では、こうした経済学の枠組みに変化をもたらしつつある関連分野の動向として、①経済体制をめぐる議論、②資源・環境問題と経済学との関連をめぐる議論、③企業形態とそのありかたをめぐる議論の3つが取り上げられる。3節では、これからの協同組合研究においては、協同組合の本質と活動しうる領域について、他の経済組織と比較分析していくことが重要だ、と指摘している。

第3章は、そうした視点からのケース・スタディである。

第4章は結論部、本書のハイライトであり、1節では協同組合の本質を論じる。河野さんの整理をまとめると次のような内容である。

協同組合とは、経済的弱者が市場経済において経済合理性を実現するための組織であるとする見方が通説をなしてきた。しかし河野さんは、それは協同組合の本質を矮小化するものであって、より広範な価値実現を目的にした組織だととらえる見方が理論的にも実証的にも妥当だ、と第3章での事例分析をふまえて明らかにしている。続けて2節では、このことをふまえれば、近未来社会における実現可能な有力な選択肢として、協同組合を中心とする独自の経済体制を展望しうることを論じ、そのイメージを提示している。そして3節では、このような社会に向けて、協同組合運動にとっていかなる主体的努力が必要なのか、の問題

提起をしている。

河野さんはこのなかで、「現行法制下では、協同組合はもっぱら市場での経済的利益を追求するものとして理解され、職能的な経済的利害の一致のみがあたかも協同組合の組織原理であるかのごとく前提され、生産者の組合と消費者の組合がまったく別個に組織されてきたが、協同組合の組織原理として、そうしたありかたのみを絶対視することは許されない」と強い口調で述べ、一般協同組合法の制定を展望している。

本書を読み返してみても、わたしはわが国のこれまでの協同組合研究の系譜をおさらいすることができ、新たな知見を得た。さらに、わたし自身で生活基本構想が大切だ、と言いつつも「協同組合は経済的弱者の組織。弱い者が集まって経済合理性を実現することが目的」という通説に毒されていたことを知らされた。

### 3. 『産消混合型協同組合－消費者と農業の新しい関係』

前著に続く本書は、河野さんの東京大学での博士論文がもとになっている。修士論文と博士論文がともに単著として世に出るケースがどの程度あるかを知らないが、当人の問題意識がシャープで、なおかつ論文そのものがこれまでの研究を凌駕するものでなければ、考えられないことである。わたしは前著と同様に、農協をめぐる戦後の諸論争を学び直すことができた。例えば、農協は職能組合なのか地域組合なのかについて佐伯・鈴木論争、太田原・鈴木論争があったが、それについても本書はきれいに整理してくれている。さらに、1988年に石見尚氏が「食べ物協同組合」づくりの提案をしていたことも分かった。

産消混合型協同組合という概念は河野さんの造語である。「農畜産物などの生産者と、その消費者とが実質的に一緒になって設立し、ともに組合員となって運営にあたる協同組合」を産消混合型協同組合と言う。

本書のサブタイトルにあるように、この協同組合の重要な柱は農業である。1995年に食管法にか

わって食糧法が施行され、株式会社の農業参入や生産者から消費者に農政の軸足を変えるなどなど農政の方向がそれまでと大きく変わってきた。

また農協や生協も規制緩和、企業との競争激化などにより経営問題、組織問題が大きく表面化し、従来の事業方式の問い直しが迫られつつあった。農協、生協ともに合併が進み、組合員の参加が後退して顧客化傾向が強まり、企業との違いが薄れ、協同組合らしさもなくなっていく。

こうした傾向は現在も進行中で、それ故に農協に対して財界やマスコミからの批判がますます厳しくなっている。そしてわたしは、今日の農協や生協の姿をみて、これは協同組合と言えるのかという問題提起をしている（拙著『農協に明日はあるか』日本経済評論社、2006）。

河野さんの本に戻ろう。

現在のわが国の協同組合は農協、漁協、森林組合、生協、事業協同組合などに分かれており、法制上も農業協同組合法、消費生活協同組合法など個別法の形態をとっている。「生産者と消費者がひとしく組合員となって運営するような協同組合は法制上欠如しており、現行の協同組合法では、生産者と消費者とが協力しあう仕組みが欠けている」と河野さんは指摘する。

その上で、現代社会は法人としての会社の行動がさまざまな問題を発生させており、行政でもうまく解決できない問題がある。この壁を乗り越えるのに、協同組合や各種の非営利組織を活用し、新しい経済システムを創造していこうではないか。その一つとして協同組合を積極的に活用することが有効であり、それは単に既存の協同組合を維持するのではなく、時代が要求している新しい協同組合を作る、あるいは既存の協同組合を新たな時代に適応したスタイルに変えていくことが必要だ、というのが河野さんの本書での問題意識である。それが産消混合型協同組合という新しいタイプの協同組合である。

本書は、「日本農業の将来と産消混合型協同組織」、「産消混合型協同組織の実像と論点」、「産消混合型協同組織と協同組合」、の3章から成る。

第1章の1節では、産消混合型協同組織がこれからの日本農業においてどのような意味をもっているかが論じられる。農業への国民的理解の促進が重要な農政課題となり、日本農業のあり方をめぐる論議にも新しい兆しが見られるなかで、産消混合型協同組織は注目すべき存在であることが提起される。続いて2節と3節では、産消混合型協同組織と深い関連を有するテーマとして、産消提携活動や都市農村交流活動の歴史と、その現段階的な特徴が押さえられる。生産者と消費者の協同という意味では、かねてから産消提携や産直が取り生まれ、都市農村交流活動も活発化しているので、その動向を見ることによって、産消混合型協同組織が生まれてきた背景やその意義に関する理解をより立体的なものにしたい、というのが河野さんの意図である。

第2章の1節では、産消混合型協同組合や協同組合類似の事例を取り上げ、それぞれの歩みと実態を個別に見ている。それをふまえて、2節では産消混合型協同組織の類型化を再度一括して行い、これらが共通してもっている組織・事業面での特色、固有の形成論理や機能を明らかにしている。

第3章では、産消混合型協同組織と協同組合との関係に絞り込まれる。1節では、職能別の個別協同組合法制に対する異論が、戦後から今日に至るまで根強く存在してきたことが掘り起こされる。2節では、協同組合の歴史と現状に照らしてみたとき、産消混合型の協同組合を認知・育成していくことが、運動の発展にとって有意義である、と論じている。さらに、現行の協同組合法制をどのように見直す必要が出てくるか、具体案が提示される。ここで示されている河野私案は、現行の農協制度に対してはかなり大きな変革の提起が含まれているが、農協の将来に暗雲が立ち込め、その存在意義が根本から問われるなかであっては、意外な農協再生のシナリオとなるかもしれない、と河野さんは述べている。

河野私案では、協同組合法の新規制定、既存の職能別協同組合法の修正、専門農協的な形態、総

合農協の産消混合型協同組合化などいくつかのケース・スタディを行っている。

本書の最後には、「今のままでは、農協は社会運動体の一員から完全に脱落するとともに、経済事業体としても資本の草刈り場にされて終わりになる公算が強い。農協を単なる草刈り場にさせてしまつては、我々の将来に大きな禍根を残すことになりはしないか」と危惧している。わたしは、現在の農協はすでに資本の草刈り場にされてしまつているし、今後の農村市場は、農協を通さずに直接資本の支配に置かれてしまうのでは、と心配している。

#### 4. 『協同組合入門』

本書は実に分かりやすい入門書である。日本、海外の協同組合の歴史と現状が説かれている。さらに、協同の現場から生の報告がずらつと並んでいて、圧巻である。

本書の構成は、「いま、なぜ協同組合なのか」、「協同組合の基礎知識」、「レポート協同組合の現場から」、「協同社会の創造に向けて」から成っている。

第2章に登場するのは、兵庫六甲農協の本野一郎、佐賀みどり農協の小野千鶴子、山梨県北都留森林組合の中田無双、岡山県日生漁協の天倉辰己、いわて生協の金子敏明、高知県高齢者福祉生協の梅原憲作、神奈川県企業組合ワーカーズ・コレクティブミズ・キャロットの黒川眞佐子の各氏。このうち、私の知っているのは本野さんと金子さんだけである。

本野さんの「たべもの協同組合」の提言や高齢者生協、ワーカーズ・コレクティブなど河野さんの説く新しい協同組合の新鮮な響きの組合が登場する。これを受けて終章にある「協同組合運動の未来」では、さらに労働者協同組合や高齢者生協、環境生協、映画生協、愛媛有機農産生協などさまざまな「新しい協同組合」づくりの事例を紹介している。その上で、今日の人びとが「食と農の再生や、環境保全を柱にした循環型社会の形成。行きすぎた競争社会の是正や、庶民間の協同をつう

じた経済生活の支え合い。働きがい・生きがいの実現や、福祉のある地域づくり」を願っているとすれば、「協同組合の使命は明らかで、大切になっている。非営利・協同セクターの活動領域を少しずつ拡大していけば、それに応じて経済のあり方も変わっていく」と、これまでの持論を具体的に展開している。

わたし自身は、本書にある本野一郎さんの「たべもの協同組合」という表現に「あっ、これだ」と納得し、ひたちなか農協で地産地消を進めるために、直売所と学校給食に照準を合わせた地域農業振興計画を策定した。そして、たべものを通して生産者と消費者が同じテーブルに座って地域の農業や食を共に考えよう、と県内の生活学校や消費者グループの学習会で説いて回つたのだった（本野一郎さんの考え方は『いのちの秩序農の力—たべもの協同組合への道』コモンズ、2006、を参照されたい）。

#### 5. 『新協同組合とは—そのあゆみとしくみ』

厳密に言えば、本書は河野さんの著作ではない。1966年の第23回ICA大会で決議された「協同組合原則」の解説書として、当時協同組合経営研究所理事長だった一栗照雄氏を中心としてまとめられた『協同組合とは』が元版である。この本はその後農協、生協など協同組合の現場で役職員教育のテキストとして多く利用され、1990年に12訂版が発行されている。さらに、1995年のICA大会で「協同組合原則」の見直しが行われたので、それに合わせて翌年に『新協同組合とは』が発行された。

それから10年経過し、その後の社会経済状況の変化をふまえた見直しをしようと、当時の協同組合経営研究所常務の高橋英俊氏が河野さんに呼びかけ、農林中央金庫や全共連の職員と共に改訂作業を進め、2007年に発行されたのが本書である。そのような制約があったので、河野さんは本書で自らの協同組合理論を全面的に展開している訳ではない。しかし、最終章では、新しい協同組合が育つことを自分の想いと重ね合わせて訴えてい

る。

本書は「暮らしと世界を見つめようー現代社会と『協同』」、「協同組合のあゆみ」、「協同組合の特徴としくみー『協同組合の原則』を学ぼう」、「協同の未来を開くためにーこれからの協同組合運動」の4章から成っている。当然のことだが、協同組合原則の解説が中心である。

ここでは最終章にある「二 いま、なぜ協同組合に注目するのか」と「三 新しい時代を協同の力で」の項目だけ紹介する。

「いま、なぜ協同組合に注目するのか」には、協同組合は何を大切にしてきたのか、「受け身社会」から一人ひとりが輝く社会に、参加型の社会に向けて、「形だけの平等」を乗り越え公平なやり方で、「協同組合セクター」を拡大しよう、ごまかしのないやり方で、地域づくりの主役として、の7項目がある。さらに、「新しい時代を協同の力で」には、レイドロー報告で提起されたこと、可能性と危機のあいだにある協同組合、「経営の危機」と「思想の危機」、われわれも例外ではない、たゆまぬ自己革新を、の5項目がある。これらの項目だけを見ても、いずれも今日の協同組合が抱えている課題と問題点分かる、というものである。

最後に「いつの時代にあっても、問題の解決はどこかから与えられた形でやってくるものではありません。そのことを一人ひとりが自覚して、みんなで力をあわせ知恵を出し、励ましあって道を切りひらく以外に答はありません」と結んでいる。

## 6. 『新協同活動の時代』

本書は家の光協会が発行している月刊誌『地上』に2003年10月から2006年12月まで連載した記事を再構成、改変し、最初の章を書き下ろした。本の帯には「人々は協同を求めている。農と食、いのち、地域の再生がはじまった!」とある。構成は、「『協同力』の時代だ」、「『農と食』のルネッサンス」、「『自給力』ルネッサンス」、「『地域と生活』のルネッサンス」、「こぼれ話『協同力』アッ

プ作戦」の5章である。

第1章は、今日の社会で協同活動や協同組合運動がなぜ必要なのかを述べ、現在の協同組合の課題と革新の方向にもふれている。第2章から第4章までは、各地で取り組まれている新しい協同活動の現場取材して、それらを報告したものから成る。茨城大学の近くにあり、開設にあたってはわたしが関わった水戸農協渡里直売所、同農協大洗直売所も紹介されている。農協だけでなく、生協や漁協、NPOなど全国各地の新たな事例が取り上げられている。そして、「農協を筆頭とした既存の協同組合は、組織の活性化や事業の革新、運動目標の見直しに根本から取り組むことが求められている」。その際「現場の熱い思いや生き生きとした活動にたくさんのヒントがある」というのが河野さんのスタンスである。

最後の第5章は、河野さんが大学で学生に接しながら、「協同」ということについてふだん感じていることをエッセイ風にしたもので、気軽に読むことができる。

本書はこれまでの著作とは違い、農家や一般の人たちを対象にしている。協同組合運動を社会に広げていくには、難しい本ばかりではダメだという思いから、自由なスタイルで書こうとした、「おわりに」にある。

## 7. 『人間復権の食・農・協同』

河野さんが先に出した『協同組合入門』に続くもので、日本農業や食のあり方、協同組合の未来などについて独自の見解をまとめたものである。

『茨城大学人文学部紀要・社会科学論集』や日本協同組合学会の機関誌『協同組合研究』などに発表したものを整理して本にした。

河野さんは「はじめに」で、さまざまな危機が一気に押し寄せてきており、先が見通せない時代がやってきた、とし、その危機として、食と農をめぐる危機、アメリカ発の金融経済危機、危機を乗り越えていくべきわたしたち自身が新自由主義のデマゴギーにのせられていることの三つを挙げている。危機を乗り越えるには、「人間性がない

がしろにされている今日の社会状況に異議を唱え、人々の主体性を回復していかなければならない。そのために『人間復権』が求められている」とタイトルの所以を述べている。

本書は「協同の力で食・農・暮らしの再生を」の序章に続き、『『半日農業論』から未来を展望する』、『産消混合型』の協同組合づくりへ、「協同組合運動のこれまで・これから」、「食・農・協同から見た『脱原発』の考え方」、「『農』と『食』の博物館をたずねて」の5章から成る。

紙幅の関係で内容を全部紹介できないので、2005年の日本生協連（日生協）の「日本の農業に関する提言」についての河野さんの考え方と現状の農協批判のみ見ておく。

協同組合関係者であればすでに目を通してある日生協の農業に関する提言は、関税の引き下げと株式会社の農業参入容認がポイントだが、河野さんはこうした考えを否定し、「地域のなかで消費者の農業への参加を図ることによって、効率性よりも多面的機能を重視した営農活動を再生させ、農家と消費者の協同をおしての食の自立を追求していく方向こそが、示されるべきではなかったのか」と主張している。わたしも同感であり、反論を書いた（前掲『農協に明日はあるか』pp 232～243）。

農協に対しても厳しい見方を示している。「日本農協の将来は小手先の対応で片づけられるほど楽観的なものではない」、「農協が存続していくには、みずからの組織の存在意義や社会的使命を、国民に前向きな形で提示することが不可欠である。存在意義のない組織は淘汰されるのが世の常である」。「農協がみずからを『産消混合型協同組合』へと進化させることが必要」と、未来の鍵は「産消混合型協同組合」にあることを提示している。

## 8. 最後に

これまで駆け足で河野さんの協同組合論を見てきた。彼からバトンを渡されたわたしは、次のランナーに確実に河野さんのともしたたいまつをつ

ないでいなければならない、と改めて考えている。

(茨城大学地域総合研究所特命教授)